実践・活動報告

名古屋市立大学大学院看護学研究科のオンライン国際交流プログラム

Online international exchange programs of Nagoya City University Graduate School of Nursing

金　子　典　代[1)]　城　川　絵理子[1)]　山　口　知香枝[1)]
中　神　克　之[1)]　脇　本　寛　子[1)]　樋　口　倫　代[1)]

キーワード：国際交流，韓国，東ティモール，オンライン
Key words : International Exchange Program, Korea, Timor-Leste, online

要　　旨

名古屋市立大学大学院看護学研究科は，2012 年度よりハルリム大学（韓国）との，2018 年度よりパーツ大学（東ティモール）との海外短期研修を学部の海外短期研修プログラムとして実施している．2020 年度は，ハルリム大学からの招聘，パーツ大学への派遣を予定していたが，新型コロナウィルス感染症（COVID-19）のパンデミックによる世界的な渡航制限のために，招聘，派遣とも中止となった．2 つの海外短期研修プログラムの代替として，2020 年度，2021 年度にオンラインによる国際交流講義を合計 4 回行った．いずれの回においても，双方の教員，学生が参加し，英語でプレゼンテーションをしたことで，学生が主体的に海外の看護や保健医療について関心をもち，視野を広げる機会を提供することができた．海外渡航が可能となる時期については不透明な点も多いが，両大学とは今後も交流プログラムが継続できるよう，交流の継続を図っていきたい．

Ⅰ．はじめに

名古屋市立大学看護学部では，2012 年度よりハルリム大学（韓国）との，2018 年度よりパーツ大学（東ティモール）との海外短期研修を学部の海外短期研修プログラムとし，派遣と招聘を交互に実施している．2020 年度は，ハルリム大学からの招聘，パーツ大学への派遣を予定していたが，新型コロナウィルス感染症（COVID-19）のパンデミックによる世界的な渡航制限のために，招聘，派遣とも中止となった．

全学的に国際交流プログラムの実施が困難となる中，名古屋市立大学特別研究奨励費の「国際交流の推進事業」区分に，新たに「オンラインによる国際的教育研究活動支援」が加えられた．名古屋市立大学看護学部では，2 つの海外短期研修プログラムの代替として，2020 年度，2021 年度に同奨励費を利用したオンライン交流講義を行ったので，報告する．

Ⅱ．ハルリム大学

1．大学概要とこれまでの交流

ハルリム大学は春川市に位置する私立大学で，一般教養学部，人文科学部，社会科学部，商学部，自然科学部，情報電子工学部，医学部，看護学部を有する総合大学である．名古屋市立大学とは 2008 年度に大学間交流協定を締結している．

2011 年度より看護学部との交流が始まり，2012 年度に本学学生が初めてハルリム大学看護学部に研

受理日：2022 年 2 月 15 日　　採択日：2022 年 2 月 21 日
[1)]名古屋市立大学大学院看護学研究科

修に赴いた．以後概ね隔年で受け入れと送り出しを継続，教員間交流を継続してきた．また名古屋市立大学特別研究奨励費の支援を受け教員間でのシミュレーション教育についての意見交換，国際共同研究も進めてきており，2021 年度には交流 10 周年を迎え記念イベントを準備する予定となっていた．しかし，2020 年からの COVID-19 流行により海外出張は困難となったため，合同国際オンラインセミナーを 2020 年度より実施している．

2．オンライン交流講義の実施

1）2020 年度「超高齢化社会における日米韓のコミュニティケア」ハルリム大学主催

2021 年 1 月 25 日にハルリム大学看護学部，米国ノースキャロライナ大学教員宅，ハルリム大学社会科学研究所，名古屋市立大学看護学部をつなぎ，双方の学生たちはそれぞれ自宅から参加する形で国際セミナーを実施した．高齢化とコミュニティケアをテーマに，教員，学生，卒業生による発表が行われた．

名古屋市立大学からは，山口准教授より地域包括ケアシステムについて，学生からは，介護予防のために行われているプロジェクトや介護ロボットの活用の実態について，またハルリム大学への派遣に参加した OB 学生が名古屋市立大学医学部付属病院で自身が勤務している病棟でのコロナ患者への病棟看護の実際についてプレゼンテーションが行われた．ハルリム大学からは，Dong Soo Shin 教授により，韓国における高齢者ケア，またアメリカの大学からは，アメリカにおけるコロナワクチンの接種状況についてプレゼンテーションが行われた．発表後は，全体ディスカッションを行い，日本での認知症予防のオレンジリボンキャンペーンについて，オレンジである理由は何か，細かいところへの質問も寄せられた．

学生からも感想として，COVID-19 流行期で海外渡航に制限がある中でも工夫してオンライン交流ができることへの感動や，海外の看護に関心を持つこと，国際的なつながりを大切にしたいとの感想が寄せられた．総計 200 名の参加があった．

2）2021 年度「日韓交流講義：看護の将来，訪問看護，コロナ禍における学生生活」名古屋市立大学主催

2022 年 1 月 25 日に第 2 回合同セミナーとして，名古屋市立大学主催で，ハルリム大学看護学部，名古屋市立大学看護学部，双方の大学の看護学部生の自宅をつなぎ実施した．看護の未来，日本の訪問看護実践，コロナ禍での学生生活をテーマに双方の学生が発表を行った．

ハルリム大学からは，韓国の看護教育の将来展望について，シミュレーションやテクノロジーの活用が進んでいることの説明がなされた．本学城川助教より，訪問看護の実状と実践について，臨床経験を踏まえたプレゼンが行われた．加えて，双方の大学生から，オンラインの中で試験，自己学習，学内広報新聞や，高校への保健教育の実践，アルバイトでの工夫，日本で人気のある韓国文化についての発表が行われた．韓国からの発表では，看護教育の中で，IT や VR が次々と韓国で導入が

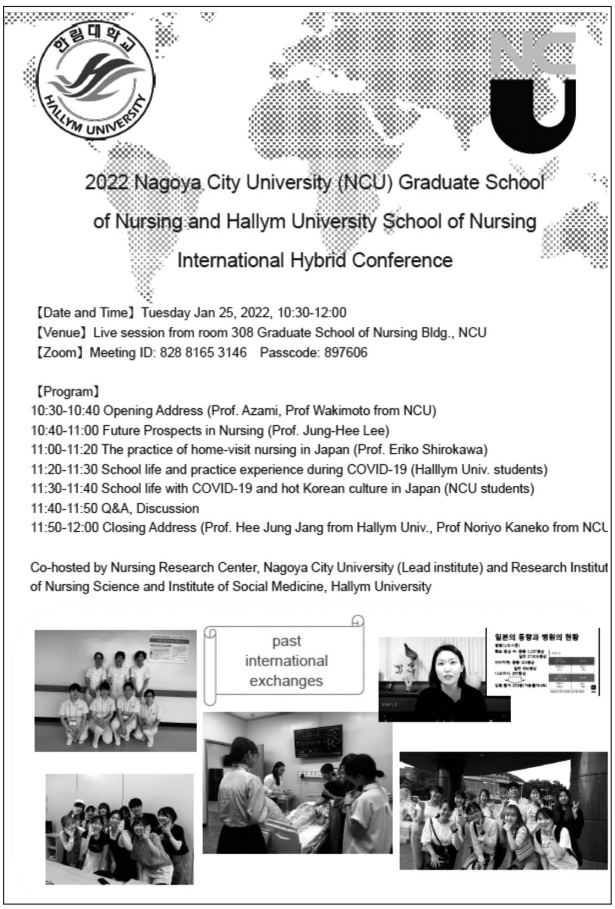

図1　2021年度日韓交流講義プログラム

図2　2021年度日韓交流講義プログラム
学生による発表

進み，今後も活用が広がる可能性があることが報告され日本側からも注目度が高かった．日本側からもVRの効果やシミュレーションセンターの学部間連携活用についても質疑応答が多くなされた．

学生からの感想として，「VRの話がとても印象に残りました．実際の手順などをオンラインでも実践のようにすることができていてとても画期的だし分かりやすいと思った」「コロナ禍で大変なことが多いけれど国を超えて同じ看護学生のかたも頑張っていると思うと自分も頑張らなければならないなと思った」といった声が寄せられた．総計115名の参加があった．

３．成果と課題

COVID-19パンデミックで国際交流プログラム継続に苦渋する中，2年連続してオンラインでの国際間共同セミナーを実施でき，また関わる教員やスタッフが増えていることは成果であった．2021年度のセミナー開始時期は，韓国，日本双方ともCOVID-19の急速感染拡大期にあたり，スタッフに時間や人的に余裕がない状態となり，本学学生も来学を予定していたが急きょ自宅からの参加となった．変更はあったが，比較的余裕を持った人員体制で臨んだことで乗り切ることが出来た．今後も，不測の事態にも対応できるよう余裕を持ったプログラムとすること，対面やオンラインにフレキシブルに切り替えることができるようにしていくことを双方が共通認識として持つことが継続するうえで重要と考えられた．

Ⅲ．パーツ大学

１．大学概要とこれまでの交流

パーツ大学（Universidade da Paz）は東ティモールにある2004年創立の私立大学である．法学，公衆衛生学，人文社会学，工学，経済学，法学の6学部を有し，同国では2番目（私立大学では最初）に大学としての認可を受けている．

看護学研究科国際交流委員会が2016年度より交流の準備を進め，両大学は2017年度に大学間交流協定を締結した．2017年8月には，看護学部学生2名がサークル活動の一環として同大学へのスタディツアーを実施，2018年度には，さくらサイエンスプログラムと名古屋市立大学特別研究奨励費により同大学より学生4名と教員2名を招聘，2019年度には看護学部の公式海外短期研修プログラムとして学生2名と教員1名を派遣した．ハルリム大学のプログラムと派遣・招聘を交互に実施することが決まり，2020年度も派遣の予定となっていた．

２．オンライン交流講義の実施

1）2020年度「キャンパス外での実習の経験」

2020年11月27日に，パーツ大学公衆衛生学部，名古屋市立大学看護学部，人文社会学部の3ヶ所をつなぎ「キャンパス外での実習の経験（Experiences of practical learning outside the campus）」をテーマに，それぞれの学生が報告をした．

パーツ大学公衆衛生学部では，Field Learning Practice（FLP）という，学生が村に滞在して健康課題を発見し，その課題に対して保健活動を実施した上でモニタリングと評価を行う合計2ヶ月間の実習がある．また，保健センターなどでの施設実習も実施している．2名の学生がそれぞれの実習内容を発表した．本学人文社会学部の学生は，商店街の遊休不動産が多数ある名古屋駅西地区で，リノベーションして喫茶店を再生する活動をしている人たちにインタビューした社会調査について，看護学部の学生は，1年次に行われる医薬看連携地域参加型体験学習でのグループに分かれて地域に参加して活動した経験をグループで発表した．

発表後の全体ディスカッションでは，パーツ大

学学生からの「AMEC での活動が地域にもたらした健康へのインパクトは何か？」という質問に対して，なかなか本学学生から手が上がらなかったが，教員から指名された学生は「自分のグループは病院のパンフレットを活用して，地域住民との対話を行ったので，何かのインパクトがあると思っている.」と回答した．総計 211 人の参加があった.

2）2021 年度「コミュニティの健康を評価する」

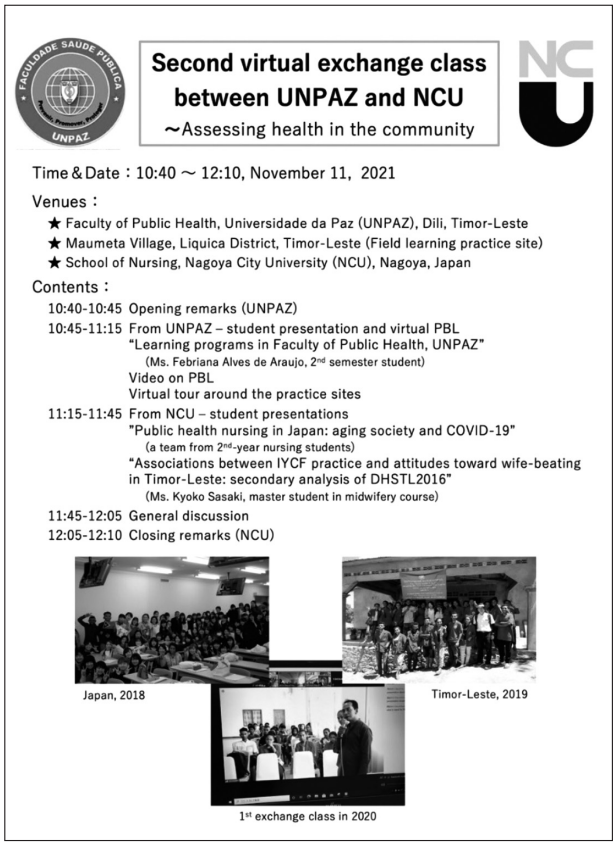

図3　2021年度「コミュニティの健康を評価する」プログラム

2021 年 11 月 11 日に，パーツ大学公衆衛生学部，同大学の FLP 実習先の村 2 ヶ所，名古屋市立大学看護学部をつなぎ，「コミュニティの健康を評価する（Assessing health in the community）」をテーマに実施した.

パーツ大学からは，同大公衆衛生学部の教育内容について，学生のプレゼンテーションとあらかじめ作成されたビデオで紹介があった．引き続き，現在 FLP の第 2 フェーズである「保健活動」が行われている最中の村の実習サイトから，栄養改善のための調理実習や，子どもに歌で手洗いを教えている様子が中継された．本学からは，まず，

図4　2021年度「コミュニティの健康を評価する」参加学生の様子

2019 年度に当時 4 年生でパーツ大学に派遣された看護学研究科博士前期課程 2 年生が，修士論文として取り組んでいる東ティモールの公式データを用いた女性の暴力に対する態度と適切な離乳食育児と関連に関する二次分析の結果を発表した．次いで，2 年生のグループが日本の保健センターの業務について，特に COVID-19 対策として行われている積極的疫学調査のことなどを説明した.

パーツ大学の学生からは，博士前期課程学生の発表に関連して，日本が子どもの低栄養を改善していった経験について，2 年生の発表に関連して，現在の日本の最大の公衆衛生課題は何かという質問があり，それぞれ，助産学の教員が日本の母子健康手帳制度について，地域保健看護学の教員がコロナ前，コロナ禍の状況について回答した．総計 248 人の参加があった.

3. 成果と課題

パーツ大学の実習期間が長く，地域や施設に深く入り込んで，学生が地域保健にコミットしていることなどが非常に新鮮に映ったようである．社会経済状況も，健康課題も大きく違う国の学生と異なるものの見方を共有することができたことは，このオンライン交流講義の成果であった．また，学部のプログラムで派遣された学生が，修士論文で東ティモールの公式データを用いた研究を実施し，結果を共有できたこともプログラムの成果の 1 つと考える．これをきっかけに，両大学での共同研究が推進されることが期待される.

最大の課題は通信状況である．独立前の騒乱でインフラが大きな被害を受けた同国では，独立当初（2002年），固定電話，携帯電話が使えていたのはそれぞれ人口の0.2%，2.1%であった．その後も固定電話はほとんど普及していないが，携帯電話の普及はめざましく，2020年は人口あたり104%となっている．多くの人は携帯電話の3Gでインターネットにアクセスしている．携帯電話はプリチャージが主流であり，また近隣諸国に比べて通信費が高く，学生などはかなり切り詰めてチャージしており，フリーWifiに頼っている．パーツ大学でも学生が多い時間帯は通信困難となることが多いそうである．交流講義でも通信負荷を軽減するために，学生各自がアクセスする方法を避け，それぞれの教室に集まって実施したが，それでも初回の交流講義時には，何度も接続が切断された．2回目の交流は，同大学の有線接続のある場所に集まって実施し，1回目よりは安定した交流となった．今後の交流においては，限られた同大学の安定したインターネット接続を活用できるかが課題である．

Ⅳ．まとめ

2020年度，2021年度に2つの大学との交流講義をそれぞれ，計4回実施した．いずれの回においても，双方の教員，学生が参加し，英語でプレゼンテーションをしたことで，学生が主体的に海外の看護や保健医療について関心をもち，視野を広げる機会を提供することができた．

しかし，本学学生の英語力や積極性については個人差があり，英語のみの実施では内容理解がきついとの学生の声も見られた．質疑応答では，日本語でのコミュニケーションでよいと促しても本学学生からの積極的な発言が少ないのが残念ではある．感想はポジティブな感想が多かったため，関心が低いとは考えにくく，このような場で発言できるような積極性を支援することは，本学の国際化を促進する鍵の1つであると考えた．

海外渡航が可能となる時期については不透明な点も多いが，両大学とは今後も交流プログラムが継続できるよう，交流の継続を図っていきたい．またハルリム大学とは交流開始10周年イベントが開催できていないため，次年度を目途に何らかの形で開催すべく準備を進めていく予定である．